
繋いでいた、それだけ(宝島弟×兄)

エイノジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋いでいた、それだけ（宝島弟×兄）

【Nコード】

N7964Y

【作者名】

エイノジ

【あらすじ】

宝島弟×兄

冬になると夏は暑いってことをよく忘れます

「川島ー、かーしまーあ」

「そんな呼ばんくても、ここに居ますから」

井上さんに呼ばれ、歩みを止める。

愛しい兄さんは、小走りで『もー川島くん、歩くの早いよー』なんて言わないし、最早小走りなどしない。

さっきまでの歩調と何ら変わらず近づいて、俺の右腕を取り、顔を密着させる。

暫く時間が止まってしまったのか。

「何してるんですか」

「…冬の匂いがきた」

訳が分からない。

申し訳ないが、発言の意図が分かりません。

「俺、冬の匂い好き」

そもそも冬の匂いとは何なのか。

それは俺の腕から放たれるものなのか。

俺の腕から放たれる匂いは勿論俺の腕の匂いだろうけど、井上さんが好きなのは腕ではなく冬なのだ。

一文字も合ってない。

一文字も、というより、二文字なところしか合ってない。

「兄さん」

「川島」

あ、言っておくがこれは名前を呼び合っただけじゃない。

そんな、恋人みたいなのはしない。

俺が“兄さん”と呼んだことに『俺はお前の兄貴じゃない』と怒った井上さんが“川島”と俺を咎めたのだ。

「…井上さん。そんなに好きならずっと持っていてください」

「ええん？」

「その代わり、捨てんとってくださいよ。飽きたからって投げ出さ
んとってくださいよ。最後まで面倒見てください」

季節は変わる。

冬になると、夏は暑いということを俺たちは忘れる習性がある。

（後書き）

エムプロ！バトン倉庫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7964y/>

繋いでいた、それだけ(宝島弟×兄)

2011年11月23日18時48分発行